

The CHALLENGER

北青山Dクリニック院長 / 腫瘍外科・血管外科医

阿保 義久

揺るがない自分のスタイルがあったから
都心での開業に成功できた。

取材／文：中村裕子
撮影：木内博

都心での開業は暴挙ではなく 勝算のある挑戦だった

都心での開業は、あらゆるコンサルタン
トから反対されたという。

「暴挙だって(笑)」

北青山Dクリニック院長の阿保義久氏は
当時まだ30代半ば。親や親族が医師という
わけでもなければ、潤沢な自己資金がある
わけでも特定のスポンサーがいるわけでも
なかった。選挙用語で言えば地盤も看板も
靴もない、いわばゼロからのスタートであ
る。勧められたのは、「東京なら近郊の国
立とか日野とか」。

従来どおりの開業医をめざすのなら、そ
うした選択が正しかったのかもしれない。
しかし、阿保氏が考えていたのは、利便性
の高い都心でこそ成り立つ新しい形の医療
施設。反対を押し切って青山で開業した。
5年後の今、その挑戦が暴挙でなかったこ
とは、実証されている。

常識や前例に縛られることなく自分なり
のスタイルを貫く生き方は、傍目には格好
良く見えても、リスクが大きい。いとも軽
軽とそれを行い、未踏の地を進みながら、
まるで開けた明るい道を歩んでいるように
も見える阿保氏の、その足下を支えている
ものは何か。少年時代からの歩みに、その
答えが隠されているのではないか。

バスケットのよう に打ち込める仕事を求めて

「子どものころからずっと熱中していたの
はバスケット。小学校4年のときに始め、

小・中・高校とキャプテンを務めました。
特に小学校、中学校時代は強いチームで、
青森県内では無敵だったんですよ」

一方で、スポーツをやっているせいで成
績が下がる、というのはカッコ悪いと思っ
ていた。負けず嫌いなのだろう。勉強も手
を抜くことなく、ストリートで早稲田大学
の理工学部にも合格する。

「でもこのころは、将来何になりたいとか
考えていたわけじゃなく、単に理系の科目
が得意だったからなんですけどね(笑)。
何になるうか、どんな仕事に就こうかって
初めて考えたのは、3年生になって就職活
動用の資料が次々に送られてくるようにな
ってからです」

そのとき思ったのは、まず自分が好きで
打ち込める仕事でなければ、ということ。
あの、バスケットのように。のめり込んで
夢中になって、とことんまでやれることを
仕事に選ぼうと思った。

「で、次が、それで飯が食える仕事という
ことですね。そしてそのうえで、ある程度
の社会的ポジションが得られればいいんじ
ゃないかって、そう考えました」

この3つの条件とその優先順位は、今に
いたるまで不動。岐路に立つたびに、何か新
しいことを始めようとするたびに、まず自
らに問うのだという。「それが好きか、興
味を持てるか、夢中で打ち込めるか」と。

大学3年生のこのときは、少年時代のバ
スケットに匹敵するほどの何かが、即座には思
い浮かばなかった。ところが、気がつくとい
目の前には、何があるんでもと懸命にがんば
る人たちがいたのだ。

「そのころ自活のために、年齢を隠して医
学部受験のための予備校で講師をしていた

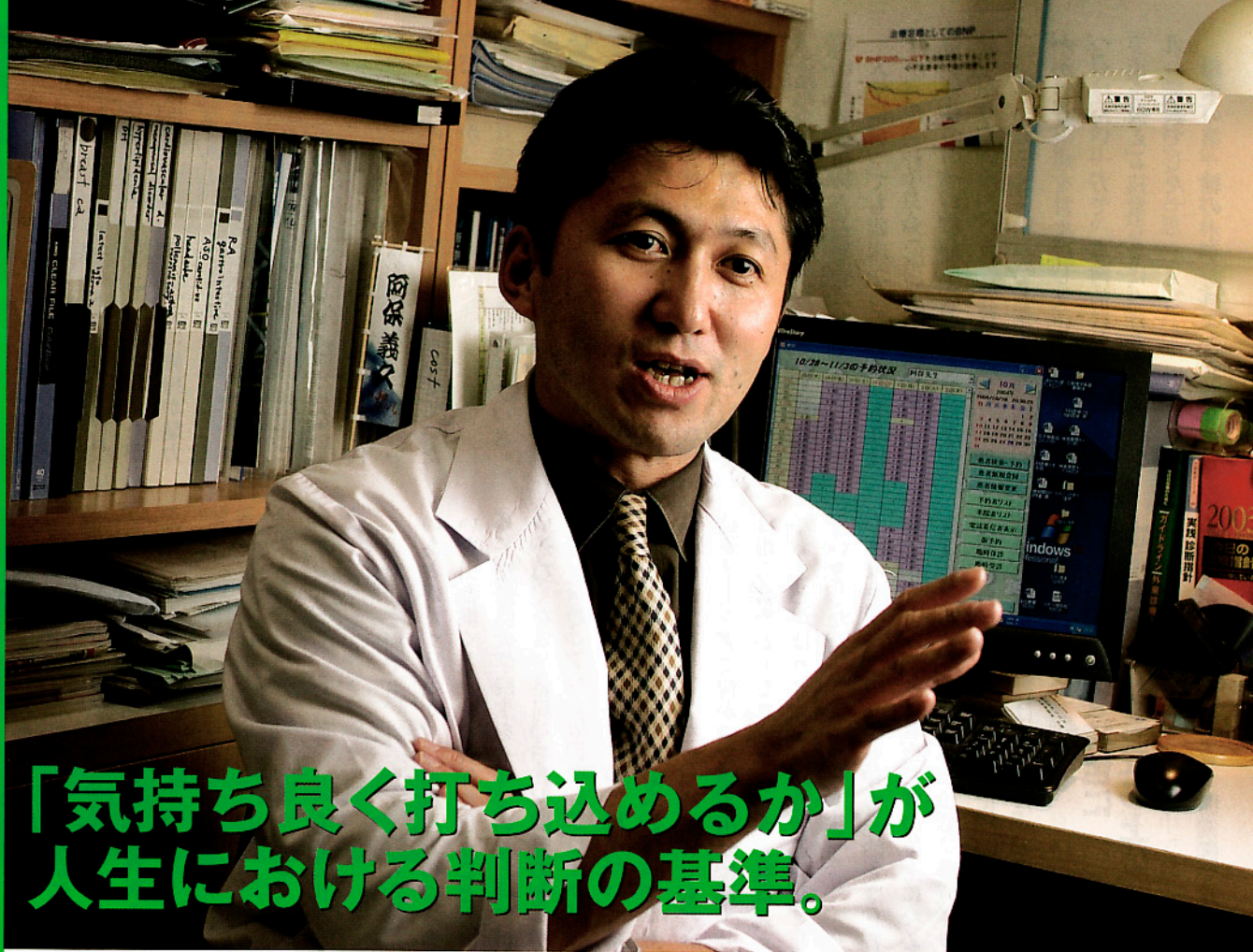
んです。そこで個人的に家庭教師を頼まれ
た生徒が2、3歳上だったりもして……」
何年も浪人してまで医学部をめざす受験
生たちを見ているうちに、「なぜ彼らはこ
こまでやるのか、医者ってそれほど魅力あ
る職業なのか、もしかしたらまた自分が熱
くなれる何かがそこにあるんじゃないか」
と気になり始める。

そして、ほんの遊び心で模試を受けてみ
たら全国でもトップレベルの成績。「これ
なら1年勉強すれば」と本気になってしま
ったのである。

PROFILE

(あぼ・よしひさ)

1993年 東京大学医学部卒業後、同大学医学部第1外科研修医、虎ノ門病院麻酔科勤務
1994年 東京都教職員互助会三楽病院外科勤務
1998年 東京大学医学部血管外科・腫瘍外科勤務
2000年 北青山Dクリニック開設
2004年 医療法人化する一方で、皮膚科部門を独立させDクリニック・フォーラムとして開設



「気持ち良く打ち込めるか」が人生における判断の基準。

虎ノ門と三楽でのキツイ毎日
こそが恵まれた修練だった

東大医学部を卒業後、入局したのは第1外科。半年間、研修医として病棟に勤務した後、麻酔科で学ぶために虎ノ門病院へ。卒業2年目からの3年半は東京都教職員互助会三楽病院外科です。こす。

「どちらも希望して勤務した病院ですけれど、ラッキーだったと思います。手術数が多くて、外科医として非常にいい修練ができましたから」

虎ノ門病院ではメスを握ることはなかったが、多くの手術に立ち会い、長い麻酔、細かい麻酔とさまざまなケースを経験し、また専門の外科以外の婦人科、整形外科、皮膚科、耳鼻科、眼科とあらゆる科を学ぶ機会を得た。

「麻酔科標榜医くらいの数の麻酔をさせてもらえましたし、外科を客観的に見られたことも良かったですね」

三楽病院では、今度はメスを握ってまさに外科医として、鍛えられた。

「外科中心の病院でしたし、懐の深い良い先輩の先生方に恵まれて、早くから執刀医としていろいろな手術を経験させてもらいました。2年目からは、通常ならば卒業後10年くらいのオーベンが務める前立ちのポジションも振られ、後輩の研修医に教えるような立場に立つ機会も与えられて、おかげで幅広くかつ深く学ぶことができたと思

ます」

早大生時代からの自活・自立のスタイルは、この修行時代も変わらなかつたので、激務にもかかわらず収入を補うための当直のアルバイトにも精を出した。文字どおり寝るまもないほどのハードワークの毎日。周囲からは「なぜそこまで」と言われたが阿保氏にとつては、収入以上に修練が魅力だったのである。

「本質的に体育会気質なんですかね(笑)」
鍛えるとなればとことん。努力して身につけたスキルは決して自分を裏切らない。トレーニングこそが勝ちを呼ぶ。少年時代に体で覚えたサクセスの感覚と、そこへいたるための方法が、阿保氏を走らせていたのだろうか。

手術もできないまま 父親を断腸の思いで看取る

卒後5年目、東大に戻ったときには、経験してきた手術の数も質も、接してきた患者の数も、同期の誰にも負けないと自負できた。

「4年半の修練で、たぶん10年分くらいの臨床経験を積めたと思います」

大学に戻っても臨床から離れるつもりはなかつた。ちょうど医局の編成が変わり、第1外科の中でも専攻を決めなくてはならなくなっていたため血管外科を選ぶ。

「外科医として、ガンのような直接生命にかかわる疾病を対象にしていく姿勢は保ちつづけた一方で、専門的に難しい血管の手術を扱える技量も身につけたいと考えた末の選択でした」

博士号取得のために大学院にも入学して、これからしばらくは大学でと思っていた矢先、阿保氏に転機が訪れる。

「青森の父が肺ガンで倒れたのです」

自分で手術をしたかったが、東京に連れてきて再検査したところ、手術ができるステージではなかつた。「自分は外科医なのに、手術ができれば救う自信はあったのに」。メスを手にするチャンスを与えられないまま、最期を看取ることに。

「息子としてはもちろんですが、ひとりの医師としても、深く考えさせられる出来事でした」

現実的な面でも、一父のやっていた事業のあとかたづけとか、金融機関とのつき合いを引き継ぐとかの責任を負うこととなり、悠長に大学院生をやっているわけにはいかなくなる。結局、それが開業のきっかけとなった。

「先生方は、身のまわりの整理がついて落ち着いたら大学に戻って来いと言ってく下さいましたし、休学をつづけていても、いいタイミングで何か論文でも出せば博士号は得られたかもしれません。が、私は通えないことがはつきりした時点で退学してしまいました」

日本では、医師の博士号も一部では有名無実化している。「看板だけの博士になる気は毛頭なく」、外科医として、磨いてきた腕に自信のあった阿保氏に、実のない肩書きに対する未練はなかつた。

日帰り手術を特色に ホームページも立ち上げ

せっかく開業するなら、開業医でなくて

はできないことをやりたい。小さいけれども専門性を生かして、小さいからこそ起動力のあるクリニックで、自分の医療をやろう。今、自分は何がやりたいか、何なら全力で打ち込めるか。そう考えてたどり着いた形が、日帰り手術を診療の目玉とする都心のクリニックだった。北青山DクリニックのDは、当初まずDay Surgery＝日帰り手術のDだったのである。

「アメリカでは日帰り手術というのがポピュラーで、たとえば鼠径ヘルニア、日本では通常数日から1週間くらい入院をとまなう手術ですが、その70%が日帰りで行われていると聞いていました。鼠径ヘルニア以外でも、下肢静脈瘤とか、程度の軽い虫垂炎とか、一般外科医が研修時代に行うような手術の多くは、日帰りで行えるはずだと私自身も考えていました。実際に、5年前当時から、ごく一部の病院や先生方は、これらの日帰り手術を始めていたんです」

ならばいっそ、それを特色として打ち出すクリニックを考えたのだ。無駄な時間もお金もかからない手術に対するニーズはきつとある。そういうクリニックなら、利便性の高い都心にあることで、関東圏からの広い範囲から患者さんが来てくれるんじゃないか。広く知ってもらうには、まずホームページを立ち上げよう。

「これもコンサルタントには猛反対されたんですけどね(笑)。手間と資金をかけてがんばってホームページをつくっても、それを見て来てくれる患者さんなんていませんよ、意味ないですってね。ところが、開業後の苦しかった1年目を支えてくれたのは、ホームページを見て来てくれた日帰り手術の患者さんたちでした」

都心で1年やれば、あとはたぶん大丈夫、勝算はあると思っていた。

「1年もてば、近郊よりも競合相手の少ない都心のクリニックのほうが、生き延びるには有利だろうと。その1年は、胃が痛くなるようなこともけっこうありましたが、そこはもう腹を括って。結果的には、人の意見に流されなくて自分の思ったとおりにやってきたのが良かったんですね」

Dでつながる医療は今 人間ドックや皮膚科分野にも

5年目となったクリニックは今、日帰り手術「Day Surgery」に加えて、成人病予防のための人間ドック「Daily Health Care」、そこから進んで抗加齢医療、そしてその抗加齢に関連し、また精神医療的な面もある皮膚科・美容皮膚科「Dermatology」も手がけ名称のDの意味を膨らませてきている。

こうした組み合わせもまた、前例のない新しいスタイルだが、阿保氏の中ではきちんとした脈絡や整合性があり、事業性の面でも意味のあることだという。

「予防医学は、父の死以来ずっと心に引っかかっていた分野。病氣や手術は、もしなくせるものならなくしたほうがいいに決まっていますよね、たとえ医者がみんな失業しても（笑）。なくせないのなら、できるだけ早く、最悪でも手術のできる間に見つけて治療するのが医者の仕事です。そのため精度の高い内容の濃い検査を、短時間で気軽に受けられる医療施設があつていい。人間ドックは、そういう発想でやるようになりまし」

待ち時間ゼロ、クリニック内で血液検査からエコーや内視鏡までひと通り行つて2時間、提携している専門施設でCTやMRIの検査に1時間、都合半日もあれば終わるコンパクトでハイレベルな検診。これも

見込んだとおり、都心で働く忙しい人々のニーズは高く、実績を上げている。

そして、今いちばんのテーマは、「公共性を持つ地域医療と、このクリニックならではのオリジナルな部分、つまり先端的な3つのDの医療とを、どう両立させていくか」。開業医だからできること、都心のクリニックだから可能なこと、いっしょに学び高め合っていける医師たちとこれからもつとやれること。阿保氏からどんなアイデアが出るのか楽しみだ。

「課題も可能性も、まだまだたくさんあります。どんな形で発展させていくとしても自分が気持ち良く打ち込める仕事なのかどうか……、まずそれを最優先に選択していく姿勢は崩したくない。そこがブレなければ、大きな間違いや失敗はないと信じているんです」

阿保氏に、これからの開業医の可能性が見えた。



高校2年生のとき、バスケットボール地区大会リーグ戦に出場



高校3年生のときの通学仲間と。阿保氏は左から3番目



東大医学部6年生のとき。医学部アメフト部にも所属し、RB(ランニングバック)として活躍